

カリクレスの誤謬（上）

新垣 誠正

目 次

はじめに

1. アテネの状況
 2. カリクレスにとっての法
 3. カリクレスの法理解に対するソクラテスの態度（以上、今回掲載）
 4. イソテース
 5. ノモスかピュシスか
 6. ソクラテス思想の独自性
- むすびにかえて（以上、次回掲載予定）

はじめに

事実のもつ重みは大きい。しかし、真実のもつ重みはさらに大きい。事実のみで最終的な結論にしないのはなぜか。なぜ事実を超えるものを探求するのであろうか。事実認識を経た真理認識にいたる道が求めつづけられているのはどうしてか。プラトンの『ゴルギアス』を手がかりとしてこの問題を考えてみたい。

1 アテネの状況

ここにカリクレスという男がいる。かれは、弱肉強食は正当であるという考えをもっている。それは動物の世界であろうと、人間の世界であろうと現実に行なわれているところを見れば明らかであると考えているからである。生きものとして生きるかぎり、弱肉強食は必然であるがゆえに。弱肉強食は自然本来（ピュシス）のすがたであって、決して賤しい考えではないとカリクレスは判定している。その意味で、自然にまさる真理はないという。これはまた、人間にも当てはまるという。というのも、人間も自然必然のなかに存在するからなのである。¹

カリクレスのこうした考え方の背景には当時の社会状況が色濃く反映している。慢性的戦争状態が続き、人心の乱れがあり、道徳的規準は弱められ、民主主義の根本が不安定になっていた時代であったからである。アテネというポリスのもつ独特の背景もまたカリクレスの考え方に大きく影響をあたえたことは間違いないであろう。ソクラテスはこのような状況のなかにあって次の

¹ プラトン 加古彰俊訳 『ゴルギアス』 482E ff.

ように言っている、

世にもすぐれた人よ、君はアテナイという、知力においても、武力においても、最も評判の高い、偉大なポリス（市民国家）の一員でありながら、ただ金銭を、できるだけ多く自分のものにしたいというようなことに気がつかっていて、恥ずかしくないのか。評判や地位のことは気にしても、思慮と真実には気がつかわず、たましい（いのちそのもの）を、できるだけすぐれたよいものにするように、心を用いることもしないというのは、と言い、もし諸君のうちの誰かが、これに異議をさしはさみ、自分はそれに心を用いていると主張するならば、その者をわたしは、すぐに去らしめず、またわたしも立ち去ることをせず、これに問いかけて、しらべたり、吟味したりするでしょう。²

金銭、評判、地位のことには執着するが、思慮や真実には一顧だにしないという気風がアテネのポリスを支配していた。しかし、それにはさらに前史があった。例えば、ペロポネソス戦争のある時期にアテネの使節がラケダイモン人に言った「強者が弱者を従えるのは世のつね」³ と。アテネにおいては、戦争状態が慢性的になり、そのような状況のなかで日常生活を送るということには確かに通常の状態ではたちゆかない多くの事柄があることは当然であろう。そのような状況のなかでアテネ市民は、「この種の教育家たち、事実上のソフィストたちが、言葉によって説得できないときに、事実において加える強制力のことだ。……——彼らは自分たちの言うことを聞かぬ者に対して、市民権を剥奪したり、罰金を科したり、死刑にしたりして、懲らしめるもの」⁴ たちのなかにあって日々を過ごさなければならないという状況であれば、そのたたずまいも守りの姿勢に入らなければならないのは当然であろう。なぜかといえば、ソフィストたちが実際に教えている内容というのは「大衆自身の集合に際して形づくられる多数者の通念」にすぎず、彼らはそれを「知恵」と称しているに過ぎないからであった。⁵ アテネというポリスはさらに次のような問題を抱えていた。

誣告者たちにたいする恐怖がなければ、ポリスの多数の住人たちはさっさと逃げ出したか、でなければ、締め付けの厳しくなったもろもろの義務を回避したであろう。あるいはまた彼らは公共の物を、どのみち前々から恥知らずにやっていたのだが、それよりもいっそう恥知らずに食べ物にしたであろう。しかしながら、この国家理念が正常な人間本性の力ではどうにもならぬほどにねじまげられていたということを証する何かがあるとすれば、このような社会悪疫を公に承認していたこと、この公然の恐怖政治がそれである。……このことをまさ

² プラトン 田中美知太郎訳 『ソクラテスの弁明』 29D～E

³ トゥーキュディデース 久保正彰訳 『戦史』 1. 76

⁴ プラトン 藤沢令夫訳 『国家』 492D

⁵ プラトン 上掲書 493A

しくあからさまに認めてそれによって多少なりと有力で、資産を有する市民すべてをこのような監視下においたのはギリシアの民主制だけであり、しかもそれが完全な状態で見られるのはアテナイ民主制だけであった。⁶

誣告者たちにとってほんとのところ訴訟などは問題ではなく、こういう訴訟をひそかに金を支払わせて示談に持ち込むのが眼目であったのである。・・・・・・罪のない人たちに対する威嚇、罪を犯した人たち、煽動政治家たち、そしてそれらの背後にいる誣告者たちとのあいだでの取引と妥協、そして一種の悪臭である。そしてこの悪臭は公共生活の隅々にまで浸透し、最も優れた市民たちの多くが公共生活に対してひそかに、また公然と背を向けるのに大々的にひと役買っていたことは確かである。⁷

市民に対する煽動政治家や誣告者たちによる介入、かれらはまた、財産を引き渡さない者たちに対する迫害をし、金銭欲のために機会あるごとに（法廷、広場、法、証人の前で）策動を計った。⁸

国家理念の捻じ曲げはアテナイ民主制の特徴であったということ、公共生活にはびこる種々の悪徳、それによる一部市民の公共生活との断絶といった問題すら持ち上がっていた。ポリス・アテナイがこのように重層的に公共的なところの問題を抱えているのであれば、カリクレスの考え方は何ら特異であるとはいえないのではないか。というのは、混乱のあるところで生きるためには強くなければならないからである。であれば、カリクレスこそ通常の考え方をもっていることになり、ここにこそ自然必然（ピュシス）があるといえるのではないか。

ポリスはこのような状況にあった。では、一体、そのような状況のなかにいて、ポリスを構成する市民とはいかなる人たちであるのか。

ポリスは一種の共同体国家であり、市民は政治的権利の平等を保持している。ポリスを構成する在留外人（メトイコイ）や奴隷と違って、市民は「一種の特権保持者として閉鎖的な集団を形成し、その他の自由人や非自由人に臨んだが、他面、市民団内部においては、様々な形での相互規制が働いており、それがポリス社会をその基底で支えていた」⁹ のであった。ポリス内において、ポリスは市民同胞のものであり、ノモスと自由によってポリスのために献身することがポリスの正義を実現することであった¹⁰。そして、ポリスを本質的に構成する市民は対外的には過酷

⁶ J・ブルクハルト 新井靖一訳 『ギリシア文化史』 p. 330 また、クセンノフォン『ソークラテースの思い出』（佐々木理訳）によれば、ある市民をゆするために誣告する連中がいることを述べている。p. 112 参照

⁷ ブルクハルト 上掲書 p. 332

⁸ ブルクハルト 上掲書 p. 332 参照

⁹ 伊藤貞夫著 『古典期のポリス社会』 p. 254

¹⁰ 仲手川良雄著 『古代ギリシアにおける自由と正義』 p. 306 参照

な力の政策を取り、強者の論理を取った。したがって、弱者に対しては奴隷か死かを迫った。こうして対外的には、他国に対する支配政策を取ったのであった。これにはそれなりの理由があった。戦時下においては外部から征服されたポリスは破壊と略奪と屈辱を受けるだけでなく、成人男子は奴隷に売られるか、殺害されるかのいずれかであり、婦女子は売却されるという扱いを受けたからである。¹¹ そして、対内的には市民の物欲、名誉欲、権勢欲等による他者に対する優位を求めた。いずれの場合にも、そこから結果することは、道徳の低下であろう。それだけではない。ギリシアの厭世観は、やがて、生への享樂へと連動する。いつ戦争に負けて殺されるか、あるいは奴隷にされるか分からず、この身を享樂に投ずるようになるのであろう。

2 カリクレスにとっての法・習慣

こうした事情に加えて、カリクレスの強者の論理はアテネが帝国として他のポリスを支配した力の政治の申し子である。それはまた、帝国と同じく個人の人生の目的も外的なもののもっとも顕著なものである財産を求めることにあった。そのためにはまず、力をもつ必要があると考える。¹²そして、そのような力が強者の論理となるものである。

しかしもう一方で、ギリシア的共同体においては人間のあり方として公正と正義が求められていたという歴史をもっている。たとえば、ヘシオドスでは労働(勤労)、公正、正義、恥心等を求め、その反対の腕力、悪事、破滅等が対比されている。¹³そして、正義とは力を意味したりはしない。力はヒュブリス(傲慢)を生むからである。¹⁴そして、正義の観点から暴力が否定される。そして、社会の平和、それを維持する正義が希求されている。正義とは「習慣」とか「やりかた」ではなく、普遍的なありかたになっているものであった、ということだけを確認しておきたい。¹⁵また、ヘシオドスとは別にイソノミアが古くから法の前の平等と言う意味をもっていた¹⁶。

とはいえ、ヘシオドスの考え方、生き方はギリシアの潮流が根底に流れてはいるが、現実的に

¹¹ J・ブルクハルト著 新井精一訳『ギリシア文化史』第一巻p. 206 参照 ここには第一次資料が掲載されているので参照されたい。また、上掲書第二巻p. 520 参照 トゥーキュディデース 久保正彰訳『戦史』3. 66にはこのことが示唆的に記録されている。しかし、ポリス間では敗れたポリスの成員は奴隷とされたが、身代金を支払って、釈放されるなどして、奴隷身分に固定化されることはなく、バルバロイがそれに代わった。M・ウェーバー 上原専緑 他訳『古代社会経済史』p. 246 参照

¹² Johahim Dalfen: PLATON WERKE Übersetzung und Kommentar Band VI GORGIAS S.137 参照

¹³ ヘシオドス 広川洋一訳『仕事と日々』185～215 参照

¹⁴ ヘシオドス 上掲書 203～214 参照

¹⁵ 広川洋一 『ヘシオドス研究所説』p. 259 参照 正義に関しては、また、ヘシオドス 上掲書270～73を参照されたい。

¹⁶ 仲手川良雄著 上掲書 p. 32

はやはり、支流と考えるとよいのではないだろうか。

ではそういうことであったとして、今一度、カリクレスの考え方は問題なしとしてみなすことができるであろうか。

カリクレスは次のように彼自身の見解を述べる。

自然の本来においては、より醜いのは、すべてまたより害悪となるもののほうがそうなのであるが、つまり、不正を受けることのほうがそうなのだが、しかし、法律習慣の上では、反対に、不正を行なうほうがより醜いからである。なぜなら、不正を受けるなどという、そういう憂き目は、男子たるものの受けることではさらになくて、むしろ、生きているよりは死んだほうがましな、何か奴隷といったような者の受けるべきことだからだ。つまり、不正を受け、辱めを蒙っても、自分で自分自身をも、また自分が面倒を見てやっている他の人をも、助けることのできないような者であるとすれば、誰であろうと、そのような人間の受けるにふさわしいことだからである。¹⁷

不正を行なうことが不正を受けることよりも醜いことはポロスとの間では確認されていた¹⁸が、ここに来てカリクレスは自然（ピュシス）と法律習慣（ノモス）とを明確に区別したうえで、自然の立場から不正を受けることが醜いことであることを立証しようとしている。彼によれば、害悪となるもの、すなわち、不正を受けることのほうがより醜いことである。それは市民として受け入れるべきものではない。それだけではない。より優れた者として不正を受けてはならないのである。優れた者はまた、力がある者でもあるのであるのだから自らを守り、友に益するものをもたねばならないのであるから弱い者のように不正を受けてはならない。自分の利益と友の利益を守るためには不正を受けることをよしとしてはならない。したがって、強くなければならない。これが自然（ピュシス）の成り行きである。

ところが、弱い者たちが集まって衆をなし、自分たちの利益を守るため、またそれは同時に強い者たちの力を殺ぐために、弱者は法律習慣（ノモス）をつくったとカリクレスは主張するのである。¹⁹ そうすること自体が弱者の弱者たるゆえんであるという。したがって、法律習慣（ノモス）は弱者が協力しあって強者を締め出すために造ったものであり、それには正当性のかけらもない。というのは、大多数の弱者は強者が多くもたないようにするために、「余計に取るのは醜いことで、不正なこと」とカリクレスには考えられたからである²⁰。

カリクレスのこの考え方から次のようなことが導き出される。法律習慣のうえでは、「世の大

¹⁷ プラトン 加来彰俊役 『ゴルギアス』 483A～B

¹⁸ プラトン 上掲書 475B参照

¹⁹ J.Dalfen op.cit.S. 322参照

²⁰ プラトン 上掲書 483B～C

多数の者たちよりも多く持つ²¹ ことは不正であるが、自然本性（ピュシス）においては優秀な者、有能な者は劣悪な者、無能な者よりも多くもつことが許される。その点で、平等（イソン）にもつことがいかにナンセンスであるかが分かるというものである。というのは、平等とは弱者によって強者を強制的に束縛することによって得られるものだからである。ここに「より多く持つ」ことと平等（イソン）に持つことは相容れないことになるのは明白である。したがって、平等に持つことはもちろん否定されている。それは自然（ピュシス）に反するからである。では、カリクレスにとって、法（ノモス）とは何か。

しかしその法とは、自然の法であって、おそらくわれわれが勝手に制定するような法律ではないだろう。われわれはその法律なるものによって、自分たちの最も優れた者たちを、ちょうど獅子を飼いならすときのように、子供の時から手もとにひきとって、これを型通りの者につくり上げているのだ。平等に持つべきであり、そしてそれこそが美しいこと、正しいことだというふうに語りきかせながらも、呪文を唱えたり、魔法にかけたりして、彼らをすっかり奴隷にしてくれ。しかしながら、ぼくの思うに、もしかして誰か十分な素質をもった男が生まれてきたなら、その男は、これらの束縛をすべてすっかり振り落とし、ずたずたに引き裂き、くぐり抜けて、われわれが定めておいた規則も術策も呪文も、また自然に反する法律や習慣のいっさいをも、これを足下に踏みにじって、このわれわれの奴隷になっていた男は、われわれに反抗して立ち上がり、今度は逆に、われわれの主人として現れてくることになるだろう。²²

カリクレスの法（ノモス）とは、すなわち、自然の法（ピュシス）である。いまはこの点だけを強調しておきたい。したがって「経済的に武装能力をもつ農民層と小市民層は軍事的にもはや欠くことのできないものであって²³、かれらが「成文法制定と市民的司法を要求」²⁴ するのは当然の成り行きであるということにはカリクレスにはどうしても耐えることはできない。

カリクレスのこのような考え方からすれば、アテネ民主主義とは相容れないということがはっきり分かる。では、カリクレスの批判する民主主義の真の姿というのはどういうものであったであろうか。

3 カリクレスの法理解に対するソクラテスの態度

アテネはペロポネソス戦争開戦以来、他国に対する「支配者の座」についてしまった。そして、

²¹ プラトン 上掲書 483C

²² プラトン 上掲書 483E～484A

²³ M・ウェーバー 上掲書 p. 216

²⁴ 同上

「同盟独裁者の地位についてはや久しい」。この地位にあるかぎり、もはやこれを手放すことは身の破滅になる。正義に反することがあってもその地位を守り通さなければならない状況になってしまった。²⁶ それだけではない。加えて、ギリシア世界にはアテネを含めてあらゆる形の道徳的退廃がひろまっている。市民は互いに意見を異にして敵視と猜疑のなかに放り込まれた。秩序が根底から覆されると、法を無視し、罪惡を重ねることに慣れた人間は激情のままに「正義を蹂躪し、おのれよりすぐれているものを敵視する」ようになっている。²⁷

上述したのは少ない事例にしか過ぎないが、アテネもその例に洩れない。アテネの民主主義者は上述した出来事をカリクレスにどのように説明するのであろうか。カリクレスはポロスとは違って、ソクラテスと堂々と議論しているのはこうした混沌とした状況に遠因があったことは否めないであろう。カリクレスはピンダロスの詩を引用して、

法こそは 万物の王なれ
死すべきもの 不死なるもの なべてのもの

しかし、彼はこの詩を次のように解釈し直す

しかし、その法とは、彼の主張によると、こうなのだ—
非道のかぎりをなしつつも
至高の腕力にてこれを正しとす
その証拠に ヘラクレスの所業をあげん
なんとすれば無償にて・・・²⁸

死すべき者、不死なる者、すべてのものの王である法（ノモス）が腕力、すなわち、強者の力に変えられてしまっている。カリクレスによれば、法とは強者の論理なのである。強者の腕力はいかに非道であっても許されるという。カリクレスのもとで、法（ノモス）は「自然の法」（ピュース）となった。²⁹ それは強者の法（ノモス）となり、それがまた、正義になった。

カリクレスのこのような解釈は妥当性をもつのであろうか。ソクラテスはカリクレスのこうした解釈に特に異議をさしはさんではないようである。すると、ソクラテスはこの解釈に賛成しているのであろうか。エレンコスの得意なソクラテスがなんの反駁もしていないのであるから、

²⁵ トゥーキュディデース 上掲書 2. 6 3 参照

²⁶ トゥーキュディデース 上掲書 2. 8 3 参照

²⁷ トゥーキュディデース 上掲書 2. 8 4 参照

²⁸ プラトン 上掲書 4 8 4 B

²⁹ プラトン 上掲書 4 8 4 の訳者脚注 1 参照

カリクレスの解釈は正しいと考えていいものかどうか。ソクラテスはカリクレスの法解釈に反駁はしていないが、確認はしている。³⁰ しかし、確認だけに終わっている。ピンダロスの「自然の正義」(ピュシス)とは何かと。そして、カリクレスの言ったことを繰り返しているだけである。

ということは、ソクラテスにとっては、自然(ピュシス)も法律習慣(ノモス)としての人為的なものであっても本来はひとつのものとして考えているからであろうか。というのは、「前五世紀前半どの伝承をみてもピュシス概念は知られておらず」、「すべてを包括し支配する不死なるピュシスの理念」にいたるのは「ゴルギアスとエウリピデス」等による表現にみられるものであって、ソクラテスはその流れをうけついでいるからであろうか。³¹

ところでつぎに、ノモスについてはどのように考えればよいのであろうか。

「^{ノミマ}法」とノモイは最初から、習俗と良い作法の書かれたる法であるばかりでなく、書かれざるほうでもある。したがって、それに違反すれば刑罰とともに恥辱が生じる。ノモイは「約束されたもの」と記されているが、これは社会契約説だけではなく、「約束」による道徳系譜説をも前提している。³²

そうであれば、ノミマ、ノモイの概念はピュシスと一致すると考えてよいであろう。³³ 対話者ソクラテスはノモスとピュシスとを対立させているのであろうか。ソフィストにおいて初めて、ノモスとピュシスが区別されるようになったということからソフィスト批判をするプラトン自身は特に両者を区別して考えることをしなかったと考えてよいであろうか。したがって、カリクレスの牽強付会ともいえるピンダロスの解釈に対しても異論をはさまず、対話者ソクラテスとカリクレスの対話を通してカリクレスのいうノモスとピュシスの区別に由来する強者の論理に論駁を加えることによって問題の解決をみようとしているのであろうか。

ところで、カリクレスの立脚点であるが、彼は正義を否定してはいない。というのは、自然の本来(ピュシス)が正義であると考えているからである。弱い者たちが数を頼みとして強い者を縛るというところにこそ正義に悖るところがあると考えているからである。³⁴ 道徳的退廃があり、民主主義の根本が不安定な時期にあって、カリクレスの態度は非難されるべきものではない。かれはアテネにあって正義の問題に取り組むほどの器量があるということで、むしろ教養人ですらあるといっても過言ではない。ではあるが、カリクレスの正義は帝国としてのアテネの正義、すなわち、支配するための正義である。正義が自然必然(ピュシス)という秩序をもつのであるか

³⁰ プラトン 上掲書 487B参照

³¹ F・ハイニマン 『ノモスとピュシス』 p. 124

³² ハイニマン 上掲書 p. 163

³³ ハイニマン 上掲書 p. 164

³⁴ J.Dalfen op.cit. S. 136参照

ら、支配も秩序なくしてはありえないものである。カリクレスはこうした「秩序」はもっている。しかし、この秩序は強者の秩序である。帝国アテネの支配は外に対すると同じように、内に向かう。支配者層は同じで、外国や国内に関係なく市民が支配されるという構図が成り立つ。下層市民も政治に参加するようになったアテネ民主制に対するカリクレスの抵抗がそこには見える。アテネ海軍の漕ぎ手としてアテネというポリスに多大な貢献をしている下層市民をいまでは無視することはできなくなった。その意味では、下層市民層の献身はポリスとの一体感をますます強めるものとなっていった。下層市民が共同体との結合を強めることによって、平等（イソン）、同権（イソノミア）を強く意識してくることは当然のなりゆきである。彼らは自らの漕ぎ手としての働きを通してポリスという公的なものに取り込まれることを意識し、ポリスにおける「共通なもの」（コイノス）としての意識が増大し、ポリスの公共的な存在になった。公共的になれば、当然、ノモスの制定にも参加することは明らかであるし、自らの権利を求めていくことは、けだし当然である。しかし、下層市民の多数の平等がカリクレスには自然（ピュシス）であるとは決して思えなかった。「牛であろうと、曾田の財産であろうと、およそ劣者、弱者のものは、すべて優者、強者の所有に帰するということ、これこそが自然本来における正義だと考えたから」³⁵である。したがって、強者は弱者からより多く持つ（プレオネクシア）ということが自然本来のことであるということになる。³⁶ このことは、繰り返して言えば、不法を行なっているのではなく、自然の法をまもっていることになるのである。その自然の法とは「われわれが勝手に制定するような法律ではないだろう」。³⁷ であれば、平等にもつべきことが、正しいことなどすることは奴隷の考えることである。³⁸ 自然に反する法律習慣は一切認めることはできない。カリクレスは強者の論理をこように展開するのであった。

ペロポネソス戦争のあいだに起こった疫病の流行が人心を道徳的に荒廃させた。³⁹ 死を目前にすれば、人心が乱れ、道徳が退廃するのは当然ではないか。自分だけが生き残るために人は何をしても許されるのではないか。

³⁵ プラトン 上掲書 484C

³⁶ プラトン 上掲書 483C

³⁷ プラトン 上掲書 483E

³⁸ プラトン 上掲書 484A

³⁹ トゥーキュディデース 上掲書 トゥーキュディデースは次のように記録している（2. 53）。「そしてついにこの疫病は、ポリスの生活前面にかつてなき無秩序を広めていく最初の契機となった。人はそれまでは人目を忍んでなしていた行為を、公然とおこなって恥じなくなった。金持ちでもたちまち死に、死人の持物をうばった者が昨日とはうって変った大尽風をふかせる、という激しい盛衰の変化が日常化されたためである。その結果、生命も金もひとしく今日かぎりと思うようになった人々は、取れるものを早く取り享楽に投ずるべきだ、と考えるようになった。栄光の目的地に到達するまでに生命があるかどうかさえ判らなくなると、誰ひとりとして名を惜しみ苦難に耐え続けていこうと真剣に考えたがらなくなった。その反対に、今の歓楽とこれに役立つものであればみな、すなわち利益であり、誉れであり、善であるとする風潮がひろまった。そして宗教的な畏怖も、社会的な掟も、人間にたいする拘束力をすっかり失ってしまった。神を敬う

このようなことを歴史的に経験してきたアテネはこれまでに述べてきたこととのあいだで相乗作用を起こしてポリス独特のエートスを醸し出していた。

このような状況のなかにあって、カリクレスにとっての法とは自然の法であって、人がつくった法律習慣であるとはとても考えることはできない。カリクレスのいわばこうした二元論的法理解に対して、プラトンは対話者としてのソクラテスを登場させてこれにどのように論駁を試みるのであろうか。

ものも、そうでないものも、みな同じ悲惨な死をとげていく、法律を犯しても裁かれて刑をうけるまで生命があろうとも思われぬ、いずれにせよすでに死の判決をうけ処刑を今か今かと待つばかりの自分らなのだ、首がとぶまえにできるだけ人生を楽しんで何がわるだろう、という思いが誰の胸にもあったのである。」